

## 自立活動におけるコミュニケーション能力の育成

～個に応じた表現活動の工夫を通して～

那覇市立高良小学校教諭 與那城 武一

### 〈研究の概要〉

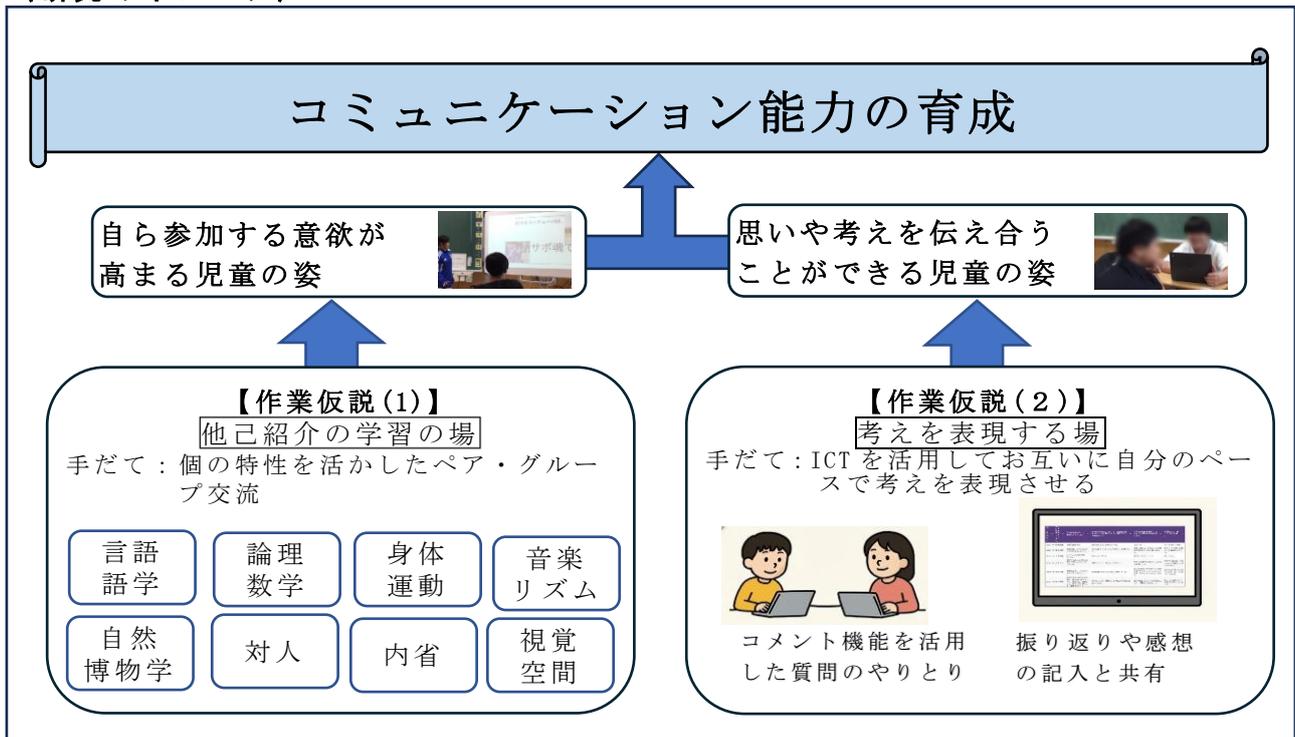
児童の実態として、他者へ思いや考えを伝えることに不安を抱く児童が多く、対面での意見交流では自信のなさや緊張から発言が消極的になる姿が見られた。一方で、令和7年度全国学力・学習状況調査児童質問調査で、ICTを活用した意見交流への質問に関しては、肯定的な児童の実態が明らかになった。

そこで本研究では、自立活動の学習で、児童用タブレットを用いて考えを可視化し、質問のやりとりを繰り返す学習環境を整えることで、お互いに思いや考えを伝え合う他己紹介の学習に取り組んだ。また、MI特性に基づくペア・グループ編成を行い、互いの興味・関心を高めながら他己紹介の学習を進めた。

その結果、他己紹介の学習で、児童は質問のやりとりを通して他者への関心や理解を深め、コミュニケーション能力が育成された。さらに、ICTを活用した学習環境は、発表や質問が苦手な児童の表現を支援し、学習の振り返りを可視化することで他者理解を深め、自己肯定感を高める効果をもたらした。

以上のことから、ICTを活かした他己紹介の取り組みを通して、他者との主体的な関わりから、児童のコミュニケーション能力を育むことができたと考える。

### 〈研究のイメージ〉



## 目 次

I	テーマ設定の理由	61
II	研究目標	62
III	研究仮説	62
	1 基本仮説	
	2 作業仮説(1)(2)	
IV	研究構想図	62
V	研究内容	62
	1 特別支援学級児童のコミュニケーション能力の育成について	
	(1) コミュニケーション能力とは	
	(2) MI チェックシートによる児童のコミュニケーション能力の実態	
	2 双方向的な関わりを促進する「他己紹介」について	
	3 ICT の活用	
	(1) 特別支援教育になぜ ICT なのか	
	(2) 障害の状態や特性等に応じた ICT の活用	
VI	授業実践（特別支援 自閉・情緒学級）	65
	1 題材名	
	2 全体目標	
	3 指導計画	
	4 授業仮説	
	5 本時の展開	
VII	結果と考察	67
	1 作業仮説(1)の検証【結果】【考察】	
	2 作業仮説(2)の検証【結果】【考察】	
VIII	研究の成果と課題	70
	1 成果	
	2 課題	

《主な参考文献》

## 自立活動におけるコミュニケーション能力の育成 ～個に応じた表現活動の工夫を通して～

那覇市立高良小学校教諭 與那城 武一

### I テーマ設定の理由

近年、多様性を尊重する社会の実現が求められる中、学校現場においても、障害のある児童を含むすべての子供たちが共に学ぶ「インクルーシブ教育システム」の推進が図られている。特に、障害者差別解消法（2016年）により合理的配慮の提供が義務化されたことを背景として、個に応じた支援の重要性が一層高まっている。本市においても特別支援学級及び通常学級における合理的配慮の実施を特別支援教育の重点としている。その中でも、コミュニケーションに困難を抱える児童には、人との関わりを深めるための合理的配慮が不可欠である。このような児童に対して、特別支援学校教育要領・学習指導要領解説自立活動編（以下解説自立活動編）では、「相手の意図を受け止めたりする双方向のコミュニケーションが成立する成功体験を積み重ね、自ら積極的に人と関わろうとする意欲を育てることが大切である」と示されている。このことから、個に応じた自立活動を通して、児童が積極的に他者と関わろうとする意欲を高め、社会の中で円滑に参加できる力を育成することが求められている。

本学級の児童は、意見交流で他者と意見を伝え合うことに不安を感じ、話し合い活動等への参加に消極的な様子が多く見られた。その課題を解決するために、自立活動において、休日の出来事を中心に発表する1分間スピーチに取り組んだ。そのため発表できるようになったが、意見の交流が深まらなかった。また、児童に「意見交流活動はどう思いますか」のアンケートを実施し、「他の人の考えがわかる」「よりよい意見が出る」と肯定的に回答した児童がいる一方、「自信がない」「騒がしくて集中できない」と述べた児童が多かった。しかし、令和7年度全国学力・学習状況調査児童質問調査の結果では、「5年生までの学習の中でPC・タブレットなどのICT機器を活用することについて、友達と考えを共有したり比べたりしやすくなる」に全員が肯定的に回答している。このように、対面での交流活動には不安や困難を示す一方で、ICTを活用した意見交流に対しては肯定的な児童の実態が明らかになった。

こうした現状を踏まえ本研究では、児童がICTを活用した学習を通して、双方向的なやりとりを繰り返し行うことで、コミュニケーション能力を育みたい。また、ICTを活用することで、考えを可視化できるため、他者へ思いや考えを伝えることが難しい児童にとって合理的配慮につながると考える。さらに、児童のMI特性に基づきペアやグループを編成し、互いに興味・関心を高めながら、質問のやりとりがしやすい双方向的な学習環境の構築を目指す。そして、児童が主体的に他者と伝え合う学習活動に参加できる授業の在り方を探るとともに、合理的配慮としたICT活用の有効性について考察することを目的として、本テーマを設定した。

## II 研究目標

児童のコミュニケーション能力を育成するために、個に応じた表現活動の工夫を実践的に研究する。

## III 研究仮説

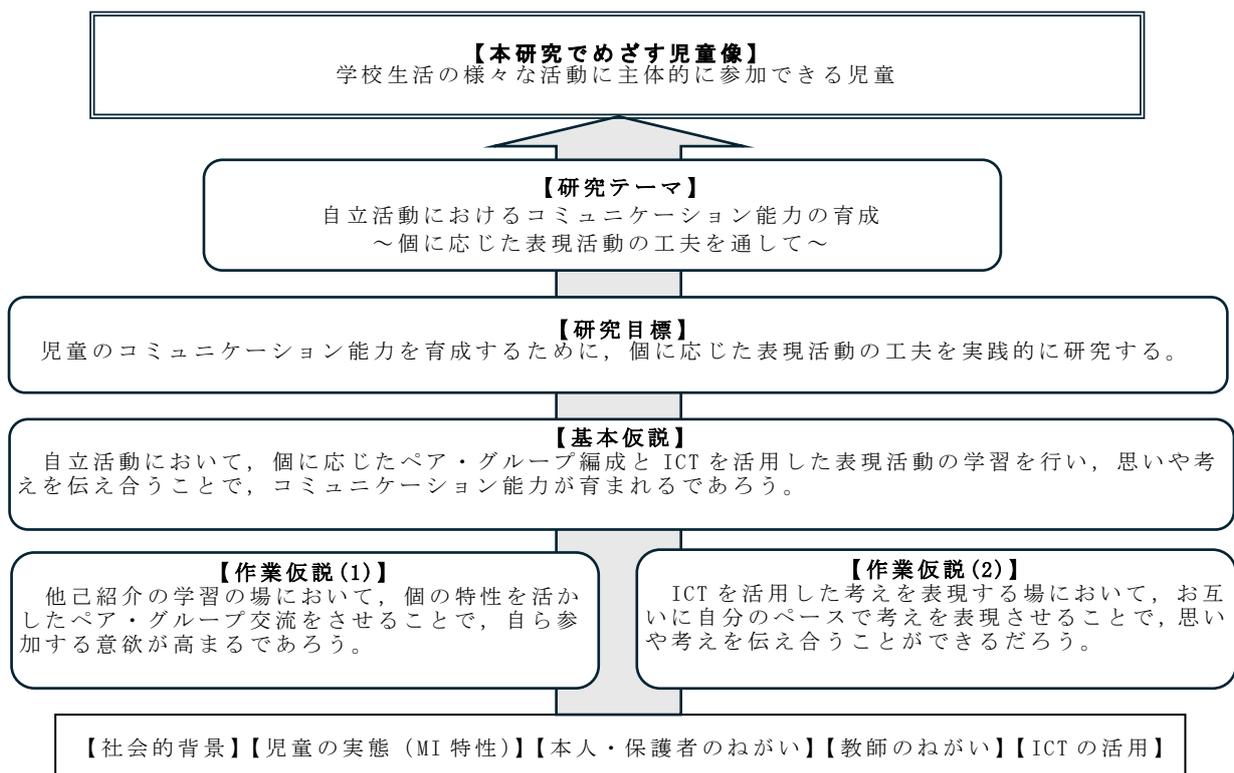
### 1 基本仮説

自立活動において、個に応じたペア・グループ編成と ICT を活用した表現活動の学習を行い、思いや考えを伝え合うことで、コミュニケーション能力が育まれるであろう。

### 2 作業仮説

- (1) 他己紹介の学習の場において、個の特性を活かしたペア・グループ交流をさせることで、自ら参加する意欲が高まるであろう。
- (2) ICT を活用した考えを表現する場において、お互いに自分のペースで考えを表現させることで、思いや考えを伝え合うことができるだろう。

## IV 研究構想図



## V 研究内容

### 1 特別支援学級児童のコミュニケーション能力の育成について

#### (1) コミュニケーション能力とは

コミュニケーション能力の定義については、文部科学省の有識者会議の報告（平成23年）と解説自立活動編において、それぞれ表1のように示されている。

表1 コミュニケーション能力の定義とは

文部科学省の有識者会議（平成23年）	解説自立活動編「6 コミュニケーション(1)」
いろいろな価値観や背景をもつ人々による集団において、相互関係を深め、共感しながら、人間関係やチームワークを形成し、正解のない課題や経験したことのない問題について、対話をして情報を共有し、自ら深く考え、相互に考えを伝え、深め合いつつ、合意形成・課題解決する能力	コミュニケーションとは、人間が意志や感情などを相互に伝え合うことであり、その基礎的能力として、相手に伝えようとする内容を広げ、伝えるための手段をはぐくんでいくことが大切である。

特別支援教育のコミュニケーションについては、解説自立活動編「6 コミュニケーション(1)」に示されている通り、自分の考えを相手へ伝えるための手段を育むために、児童の特性や発達の段階に応じて、言語的手段のみならず、視覚的・身体的・行動的な表現や補助的なコミュニケーション手段（ICT機器等）を活用しながら、他者との関わりを豊かにしていくことが重要である。

以上のことから、コミュニケーション能力とは、単に言語によって自分の考えを相手に伝える力にとどまらず、相手の意図や感情を理解し、状況や文脈に応じて適切に応答しながら、互いの考えや感情を調整していく力であるといえる。

(2) MI チェックシートによる児童のコミュニケーション能力の実態

本学級児童7名は、ASDや場面緘黙など、コミュニケーション領域に特性を持つ児童が含まれる。そのため、円滑な意思疎通や集団活動への参加を促すための個別的な支援・配慮が不可欠である。そこで、ハワード・ガードナー（1943）の Multiple Intelligence（以下MI）理論を基にしたMIチェックシート（本田2010）を活用して、児童それぞれの8つのMI特性を検証した（表2）。その結果

表2 8つのMI特性の一覧 本田（2024）を参考に筆者作成

MI 特性	好きなこと、得意なこと
言語・語学	文章を読む、書く。好きな分野の色々な単語を調べる、覚える。いろいろな文章表現をする。外国語を学ぶ。
論理・数学	量を当てはめて考える。予測する、仮説を立てる、比較するなど。
内省	一人でじっくり感じる、考える。物事の道理、論理などに気づく。
自然・博物学	様々な知識を集める。情報を分類、整理する。
音楽・リズム	音楽を聴く、歌う、演奏をする、リズムに合わせて動く等。
視覚・空間	図や絵を見る、描いて理解する。全体像を捉える、見分ける、映像を記憶する。
身体・運動	運動、スポーツ、ものづくり、身体で表現。
対人	人と関わる。他者を理解する。リーダーになる。グループ活動。

から、本学級の児童の得意なMI特性は、対人と論理・数学、自然博物学であることがわかった。本田（2024）は「MIチェックシートの結果から、児童の得意なMI特性を活性化して苦手な特性を育てていくのがMIの学び方である。」と述べている。そこで、一人一人の得意なMI特性が同じペア・グループを編成した（表3）。得意なMI特性が同じペア・グループで学習に取り組むことで、共通の興味・関心を手がかりに児童同士のやりとりが活性化し、コミュニケーション能力が育成されると考える。

表3 児童の得意なMI特性

得意なMI特性	人数
対人	2名
論理・数学的	3名
自然・博物学	2名

## 2 双方向的な関わりを促進する「他己紹介」について

「他己紹介」とは、他者が人物を紹介する行為であり、自己紹介とは異なる独自の有用性を備えている（表4）。第一に、他者の視点を通じて本人が気づかない特性を認識でき、自己理解の深化につながる。第二に、紹介者と被紹介者の関係性が反映されることで、相互理解や信頼関係の構築が促進される。第三に、他者による証言は本人の自己評価よりも説得力を持ち、信頼性を高める効果がある。また、本学級では、他己紹介の取り組みによって、質問のやりとりを生み出す環境を形成できると考える。さらに、紹介用スライドを作成し、発表する過程では、聞き手も友人の新たな一面や長所に気付き、それを共有できる点に教育的意義がある。加えて、紹介される経験は自己肯定感の向上にも寄与する。「他己紹介」は、自己紹介を補完しつつ、人間関係の円滑化を促す重要な手法であると考えられる。

表4 「他己紹介」の有用性 筆者作成

	他己紹介	自己紹介
第一(視点)	客観的	主観的
第二(効果)	相互理解・信頼関係の構築	情報の伝達
第三(信頼性)	第三者の証言により説得力が増す	控えめ、または自慢に見える

## 3 ICTの活用

### (1) 特別支援教育になぜICTなのか

「特別支援教育でICTを活用しよう」国立特別支援教育総合研究所(以下特総研)では、「障害のある子供一人一人の教育的ニーズに合わせた適切な教材等を活用することで、さまざまな困難を取り除いたり、減らしたりすることができます。ICTの活用はそうした子供たちの可能性を広げる機器として、またこれからのインクルーシブ教育システム推進において合理的配慮を進めるために大きな役割を果たすことができます」と述べられている。これらのことから、障害特性により人前で話すことの困難さを抱えている場合には、ICTを効果的に活用する必要があるといえる(図1)。

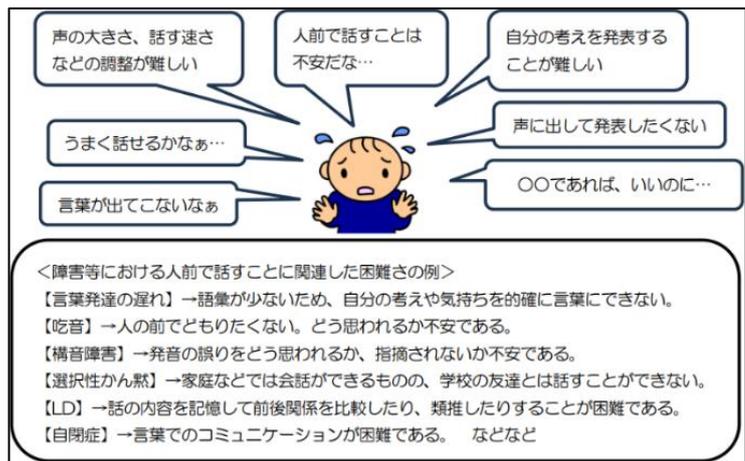


図1 特別支援教育リーフ Vol.10 (特総研)

また、新しい時代の特別支援教育の在り方に関する有識者会議(2021)で、「ICTは、(中略)障害による学習上又は生活上の困難を改善・克服するための指導に効果を発揮したりすることができる重要なものである。また合理的配慮を提供するに当たっても必要不可欠なものとなりつつある。」と述べられている。これらの資料から、児童が抱える困難を踏まえ、ICTを「話す」「伝える」ための選択肢として位置づけ、合理的配慮の一環として活用することの重要性が確認できる。

### (2) 障害の状態や特性等に応じたICTの活用

令和7年中央教育審議会から公表された論点整理において、「(前略)一人一人の障害の状態や特性等に合わせた学び方につながるICT活用について、更なる促進が必要」と述べられている。そして、『特別支援教育リーフ Vol.1.3』(特総研)では、「子供

私たちは何がうまくできていないのかを捉え ICT を活用する目的を考え、実際にどのように ICT を活用していくのかを検討することで効果的な ICT を活用した支援を行うことができます。」とある。本学級の児童は、交流場面で即時的な発言ができないことや周囲の音、視覚情報の多さで集中で

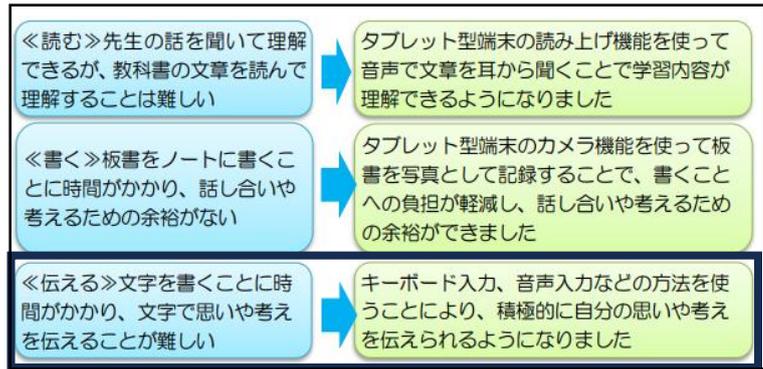


図 2 特別支援教育リーフ Vol.3 ICT の効果的な活用（特総研）

きない、また他者の視線を過剰に意識してしまう特性があるため、ICT を効果的に活用することで、自分のペースや特性に応じて考えを整理し、表現することができる（図 2）。

以上のことから、ICT による合理的配慮により、個の特性に起因するコミュニケーションの障壁が軽減され、より自由に自分の考えや意見を他者に伝えることができるようになる効果が期待できる。そうした児童に対して、特性に応じて ICT を活用することで、お互いに思いや考えを伝え合うことが増えるだろうと考える。

## VI 授業実践（特別支援 自閉・情緒学級）

- 1 題材名 「友達の良いところを紹介しよう」
- 2 全体目標 ア 友達について調べたことを楽しく発表できる。  
イ 友達の発表の良かったところに気づき、表現できる。
- 3 指導計画（全 7 時間）

時	学習活動・内容（評価項目）	時数
自立活動	1 自分の好きなことを発表しよう（スライドを作成して発表できる） ・みんなの知らないことを伝える。事前に発表の例を教師の自己紹介をして示す。	1
	2 友達の良いところを紹介しよう①ペア・グループで質問のやり取りをして必要な情報を集める。（質問のやりとりができる） ・得意な MI 特性が似た児童同士のペア・グループ編成。 ・基本の質問をして、それ以外はみんなの知らないことを聞き出す。 ・質問の配慮事項、相手の言えないことは無理に質問しない。そのことを質問、返事する際も相手が嫌にならない言い方や答え方を考える。	1
	3 友達の良いところを紹介しよう②スライド作り（質問して集めた情報を基にスライドを作る） ・見て楽しいスライドを作る。	1
	4 友達の良いところを紹介しよう③スライド作り（質問のやりとりをして、スライド作成ができる） ・児童の自己肯定感を高める工夫として、教師が学級の児童の良いところをスライドで伝える。紹介される側が、うれしくなるような発表ができるように伝える。	1
	5 友達の良いところを紹介しよう④（相手に伝えることを意識して発表の練習ができる） ・「かれーライス」、「うめライス」の確認。 ・1分間スピーチで取り組んできた、発表や質問の仕方の確認。 ・紹介される側が、うれしくなるような紹介。	1
	6 友達の良いところを紹介しよう⑤発表（本時）	1
	7 友達の良いところを紹介しよう⑥（友達の良いところを紹介し合った感想を Google フォームに入力して発表する。） ・残りの 2 人の発表を聞く。 ・2 人の発表に対しての質問や良かったところをコメントに入力する。 ・スプレッドシートで共有する。 ・単元を通じた学習のふりかえり。	1

#### 4 授業仮説

- (1) 発表会において、個に応じたペア・グループで、完成したスライドを発表することで、他者への関心や理解が深まり、自ら参加する意欲が高まるであろう。
- (2) 発表を聞いての感想や質問などは、ICTを活用することで、伝えることへの困難さが軽減され、伝え合うことができるだろう。

#### 5 本時の展開

段階	学習活動	□指導上の留意点, ◇個への対応, ◎評価			
		A児・E児	B児・F児	C児・G児	D児
つかむ・見通す5分	1 はじめのあいさつをする。	◇姿勢を意識し、号令に合わせて、あいさつするように促す。	◇姿勢を意識し、号令に合わせて、あいさつするように促す。	◇姿勢を意識し、号令に合わせて、あいさつするように促す。	◇あいさつシートを準備する。号令に合わせて、あいさつするように促す。
	2 学習の準備活動をする。				
活動30分	3 本時のめあてを確認する。 ・発表の仕方、聞き方について確認する。	めあて 発表を聞いて、良かったところを探してみよう。			
	4 Google スライドを使って、友達の紹介をする。 (1) 友達の良いところを発表する。 発表の流れ ・紹介者と紹介される人が前に出る。 ・E児がA児を紹介(以下→) A児→E児, E児→B児 B児→D児, F児→D児 D児→F児 (2) 発表ごとに、さらに聞いてみたいことを質問する。	◎調べたことを発表できる。 ◇「かれーライス」を意識して発表するように促す。	◎調べたことを発表できる。 ◇「かれーライス」を参考に発表するように促す。	◎調べたことを発表できる。 ◇「かれーライス」を参考に発表するように支援する。	◎調べたことを発表できる。 ◇指さし、または音声で発表できるように支援する。
振り返り10分	5 友達の発表を聞いて、思ったことや感じたこと、良かったところを入力して全体で共有する。 ・コメントを画面に映し出して共有する。	◎発表の良かったところを見つけることができる。 ◇発表を聞くときは、「うめライス」を意識させる。相手のことを考えて入力できるように言葉かけを行う。	◎発表の良かったところを見つけることができる。 ◇発表を聞くときは「うめライス」を意識させる。相手のことを考えて入力できるように言葉かけを行う。	◎発表の良かったところを見つけることができる。 ◇発表を聞くときは「うめライス」を意識させる。文での入力が難しい場合、絵文字も混ぜて表現できるように支援する。	◎発表の良かったところを見つけることができる。 ◇発表を聞くときは「うめライス」を意識させる。考えたことを入力する時間を確保する。
	6 まとめ	□本時のめあてから、児童の声を拾って学習のまとめをする。 □本時の学習を振り返る視点を提示する。 □発表できたこと、そして発表を聞いて友達の発表の良いところを見つけられたことを称賛する。			
	7 振り返り ・Google フォームに入力して、スプレッドシートで共有する。	◎振り返りの視点に沿って、考えを入力できる。	◎振り返りの視点に沿って、考えを入力できる。	◎振り返りの視点に沿って、考えを入力できる。	◎振り返りの視点に沿って、考えを入力できる。

## Ⅶ 結果と考察

### 1 作業仮説(1)の検証

他己紹介の学習の場において、個の特性を活かしたペア・グループ交流をさせることで、自ら参加する意欲が高まるであろう。

#### 【結果】

本研究では、児童が自立活動を通して、双方向的な関わりからコミュニケーション能力を育成できるように、自立活動の単元を「他己紹介」とした。MI特性が似たペア・グループを編成し、質問のやりとりを必然的に行う学習環境を設定した。

第1時の学習では、他者へ楽しく伝えることを意識させてスライドを作成し、児童それぞれが自分の好きなことを楽しく、自己紹介する様子が見られた。しかし、発表を通して他者に伝えることはできたが、質問や双方向的なやりとりは見受けられなかった。

第2時から第5時まで、他己紹介のスライド作成を通して、他者との関わりが深まる姿や楽しんでる姿が見られた。質問されたことを相手に伝えられるようになっていく行動の変容や他己紹介のスライド作りを通して友達の好きなことや良いところに気付き、喜んでいる姿が見られた(表5)。本時・第7時の、発表の場では、声が出せない友達に対して助け合う姿、他己紹介を通して、お互いのことを発表し合い喜ぶ姿や他者の新たな一面に気付く姿が見られた。また、発表の際には、それぞれの児童がクイズやランキング形式で工夫した発表を行った。A児は、授業以外の学校での様子を観察し、E児

表5 第2時から第6時(本時)までの児童の意欲の高まり(児童の振り返りより)

	第2時	第3時	第4時	第5時	第6時(本時)・第7時
A児	質問されたことを相手に <u>伝えられた。</u>	質問されたことを相手に伝えられた。	他己紹介のスライド作りが楽しかった。	良いところを探してスライドを作ることが楽しかった。	声の出せない人の代わりに他の友達がやっていて、こんな風に助け合うんだと分かりました。
			スライド作りを楽しむ	他者の良さを発見し喜ぶ	さらに他者の良さを発見
C児	質問されたことを相手に <u>あまり伝えられなかった。</u>	質問されたことを相手に伝えられた。	他己紹介のスライド作りを通して、Gさんとお互いの好きな車について話ができて嬉しかった。	他己紹介のスライド作りを通して、友達の良いところがわかったり、パソコンが楽しいと思った。	みんなにGさんの知らないところをいっぱい教えられた。 好きなものを紹介されてうれしかった。
		伝えることができた	お互いに着物を伝え合うことができた	他者の良さを発見	発表したこと、されたことを喜んでいる
D児	質問されたことを相手に <u>伝えられなかった。</u>	質問されたことを相手にコメントを使って伝えることができた。	クイズを完成させることができました。次の時間にFさんの良いところと終わりのスライドを作って終わらせたいです。	他己紹介のスライド作りを通してFさんの好きなことをたくさん聞くことができてよかったです。	みんな違う良いところがあることを感じました。 好きなことや物を紹介されて嬉しかったです。
		伝えることができた	次時への意欲	他者の良さを発見し喜ぶ	違いの良さを感ずる自己肯定感の向上
F児	話ができない人と関わる <u>ことができた。</u>	質問されたことを相手に伝えられた。	他己紹介のスライドを一枚ずつかけた。	コメントで質問して、いろいろ修正できた。	好きなことや得意なことが自分の予想とは違っていた。
		伝えることができた	自らスライド作りを進めている	より良いスライド作りを進めている	他者への関心が高まる

も気づいていない良いところを発表していた(図3)。E児はクイズ出題時に反応がないと、みんなに「手を挙げよう」と、全体に呼びかけ、積極的に他者と関わろうとする意欲が見られた。また、G児は第7時で発表を予定していたが、「今日発表したい」と、発言するなど、発表への意欲を見せてくれた。

Eさんのいいところランキング	
<b>1位</b>	<b>友達がいっぱいいるところ</b> 6年2組で、Eさんの周りに友達がたくさんいる。私が思う理由は、Eさんがやさしいひとだからだと思う。友達が荷物を運んでいるときに助けていた。
<b>2位</b>	<b>よく笑うこと</b> 6年2組でとても笑うところをよく見る。友達と喋っているときに笑っているところをよく見る。
<b>3位</b>	<b>よく食べる場所</b> 嫌いな食べ物がなくてきのことかも食べれる。好きな給食は、クリスマスケーキ。25日の給食のデザートは、、、クリスマスケーキはチーズケーキが良いそうです。

図3 ランキング形式で工夫されたA児のスライド

授業後のアンケートでは、「学級の友達との学習活動を通じて、自分の考えを深めたり、新たな考え方に気付いたりすることができていますか。」で、「少しできる」から「できる」に3人増え、「できない」が「あまりできない」に1人増えた(表6)。授業後のMI調査では、A児が4ポイント、B児が2ポイント、D児が6ポイントと、コミュニケーション能力に関するMI特性(対人)の上昇が見られた(図4)。

表6 アンケート結果

質問：友達との学習活動を通じて、自分の考えを深めたり、新たな考えに気付いたりすることができていますか。			
	授業前	授業後	変容
できる	0人	3人	「できる」に3人増えた。
少しできる	6人	3人	
あまりできない	0人	1人	「できない」が「あまりできない」に1人増えた。
できない	1人	0人	

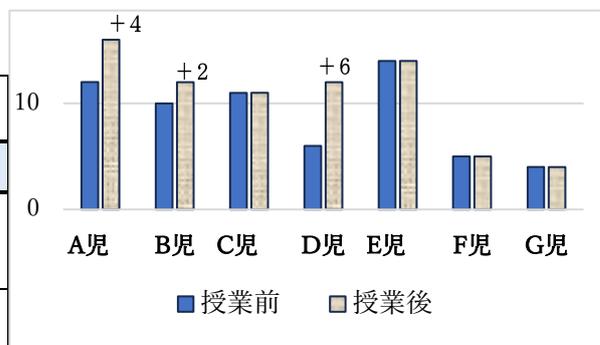


図4 MI特性(対人)調査事前事後の結果

### 【考察】

表5より、MI特性が似た児童同士でペアやグループを編成したことにより、共通の興味・関心を手がかりに質問のやりとりが円滑に進んだと考えられる。話題が見つけやすく、相手の話を理解しやすい環境が整ったことで、双方向的なコミュニケーションが自然に生じやすくなったといえる。また、スライド作成では積極的に質問し合う姿やコメント機能を用いて相互に考えを伝え合う姿が見られ、得意なMI特性が似た児童同士で、質問のやりとりを繰り返したことにより、他者と関わることへの安心感が蓄積された結果であると考えられる。

本時の発表場面では、クイズ形式や友達の良いところを発表し、紹介される側も肯定的に受け止める様子が見られた。特にE児が全体に呼びかける場面や、G児が発表意欲を示した姿からは、他者との関わりを自ら広げようとする意欲の高まりがうかがえる。これは、得意なMI特性が似たペア・グループ編成による「他己紹介」という学習活動を通して、新しいことを他者に伝える喜びや反応を得る経験が児童のコミュニケーション意欲を高めた結果であると考えられる。また、質問されて回答に困っていたD児(場面緘黙)に対して、F児がチョークを渡してD児の回答を支援する姿が見られた。その姿から、相互関係が深まり、支え合う関係性が育まれたと考える。

表6のアンケート結果で、「少しできる」から「できる」が3人に増えたことから、本単元において、MI特性が似たペア・グループを編成したことで、質問のやりとりが活性

化され、互いのことを知り、安心して関わることのできる学習環境が形成されたと考える。また、図4のMI調査結果からは、児童3名のMIの対人特性が上昇したことで、3名の児童は本学習を通してコミュニケーション能力が育成されたと考える。一方、数値に変化が見られなかった児童についても、「みんな違ういいところがあることを感じました。」との感想から、MI特性に基づくペア・グループ編成を肯定的に受け止めている。

## 2 作業仮説(2)の検証

ICTを活用した考えを表現する場において、お互いに自分のペースで考えを表現させることで、思いや考えを伝え合うことができるだろう。

### 【結果】

本単元では、ICTを活用した他己紹介の学習を行い、発表や質問が苦手な児童の表現支援と、振り返りの可視化による、コミュニケーションの育成について検証した。

第5時までのコメント機能の活用により、自分のペースで考えを整理・表現できたことで、質問のやり取りが活性化し、他者への理解を深めようとする姿が見られた。

図5では、B児とD児が、他己紹介の情報を収集するために、コメント機能をしている様子である。B児が3つ質問した後にD児が遅れて答えている。D児は、質問に対してじっくり考えて答えるため、遅れて答えている。コメント機能を活用することで、お互い自分のペースで質問し、回答する様子が見られた。

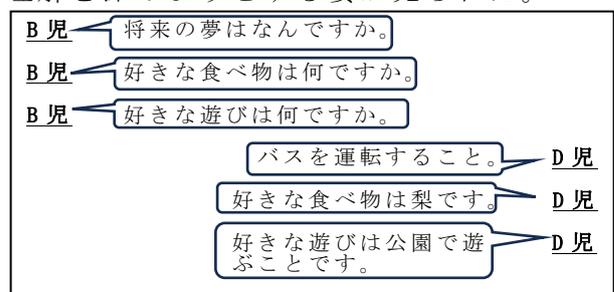


図5 コメント機能を活用した質問のやりとり

また、G児は日頃、授業の振り返りを書くことが難しいため、個別支援を行っている。しかし、タブレットを使って振り返りを入力させると、内容は少ないが一人で取り組むことができた。第2時では、自分の考えを伝えられなかったが、第3時では伝えられるようになり、相手のことを知り、紹介したいとの振り返りが見られた(表7)。

表7 G児の意欲の高まり(児童の振り返りより)

	第1時	第2時	第3時	第4時	第5時	第6時(本時)・第7時
G児	伝えられた。	伝えられなかった。	まあまあ伝えられた。	知ることができた。	紹介したい。	知らなかったことがわかった。

本時の発表では、紹介される児童の好きな食べ物や将来の夢などをクイズ形式で提示し、みんなが楽しめるように工夫した発表が見られた。また、発表後のコメント共有から、相手の良さに気付く姿が多く見られた。D児(場面緘黙)については、音声出力機能を用いて発表し、ICTが表現手段の拡大につながった。感想はコメント機能を活用して振り返りはGoogleフォームで行い、スプレッドシートで可視化したことで、お互いの思いや考えを共有できた。

表8のアンケート「学習の中で、ICT機器を活用することで、自分の考えや意見を分かりやすく伝える

表8 ICT機器の活用アンケート結果

質問：学習の中で、ICT機器を活用することで、自分の考えや意見を分かりやすく伝えることができる。		
回答項目：(できる・少しできる・あまりできない・できない)		
	授業前	授業後
A児	少しできる	できる
B児	少しできる	できる
C児	少しできる	できる
D児	あまりできない	できる
E児	できる	できる
F児	少しできる	できる
G児	あまりできない	あまりできない

ことができる」の結果からは、「できる」と回答した児童が授業前は1人だったが、授業後には6人に増えた。

### 【考察】

図5で、B児の質問に対して、D児が後から回答している様子から、即時的な回答が苦手な児童もコメント機能を活用することで、自分のペースでじっくり考えて回答できることが確認できた。また、コメント機能は、自分のペースで思考を可視化できるため、対人関係に苦手意識のある児童の自己表現を支える有効な手立てになったと考える。特に、D児（場面緘黙）にとって、コメント機能は自分の考えを安心して表出できる有効な手段となり、主体的な質問や回答につながった。また、音声出力機能を活用することで、自らの考えを音声で伝えることを可能にし、自己表現を支えるICTの有効性が確認できた。そして、G児がタブレットを活用して、振り返りの入力に取り組んだことから、書くことが苦手な児童にとって、障壁を下げることに伴って学習意欲を高める効果も期待できる（表7）。

表8のアンケート結果で、「できる」と回答した児童が授業後に6人に増えたことは、児童がスライド作成やコメントでの質問のやりとり、発表を通して、他者へ自身の思いや考えを伝えることができた学習の成果だと考える。また、B児は「スライドやコメントは、後から読み返すことができる」と、即時的な回答が求められずに自分のペースで読み返し、思いや考えを伝えたり、短期的な情報の記憶が苦手な児童にとって有効な手立てとなるなど、ICT活用への肯定的な意識の高まりが確認できた。

以上のことから、ICTの活用は、発表や質問が苦手な児童が思いや考えを伝えるための表現支援となり、コミュニケーション能力の育成において有効であると考えられる。

## Ⅷ 成果と課題

### 1 成果

- (1) 他己紹介の場で、得意なMI特性が似た児童同士でペア・グループ交流をさせることで、共通の興味関心を手がかりに、質問のやりとりが活性化され、自ら参加する意欲の向上につながった。
- (2) 児童の表現活動にICTを活用することは、個に応じた合理的配慮となり、自分のペースで思いや考えを伝え合うことができた。

### 2 課題

- (1) 交流の場において、得意なMI特性だけでなく、異なるMI特性の児童同士でも交流させることで、対人関係を育む必要がある。
- (2) ICTを活用した児童のコメントや振り返りが表面的にとどまっているため、他者の思いや考えを広げたり深めたりする手立てを考えていく必要がある。

### 《主な参考文献》

- 『特別支援学校教育要領・学習指導要領解説 総則編』 文部科学省 開隆堂 2018  
『特別支援学校教育要領・学習指導要領解説 自立活動編』 文部科学省 開隆堂 2018  
『「8つの知能」をいかすインクルーシブ教育 MI理論で変わる教室』 本田恵子 学事出版社 2024